

# 歴史から学ぶ「福山」

# 郷土の偉人たち

きょうどのいじん — 第47回 —

皆さんが暮らす福山市には、かつて偉業を成し遂げた多くの先人がいます。今では忘れられた、郷土にゆかりのある偉人たちを中心に紹介します。



田辺写真館 (1928年頃)  
(写真提供: 大阪樟蔭女子大学 田辺聖子文学館)



執筆 エフエムふくやま 専務取締役 局長  
田中 宏行  
(福山市立御幸小学校・幸千中学校出身)

## 福山出身の祖父が創業した写真館で生まれ育ち、人間観察力を磨く

「おせいさん」の愛称で親しまれた田辺聖子は、大阪弁の軽妙な語り口で、恋愛や結婚生活にまつわる人間心理を温かく描いた人気作家です。そのルーツは広島県福山市にあります。

聖子の祖父・田辺(田邊)美男は、1882(明治15)年、現在の福山市御幸町中津原・新茶屋の井溝川沿いにあった油屋の一人息子として生まれました。「現在、田辺家は葬祭会社を経営」早くに父を亡くし、明治維新後の社会変動により家業が立ち行かなくなったため、母(聖子の曾祖母)を伴い、一旗上げようと大阪へ出ました。商家の丁稚となりますが、負けん気が強く才覚に溢れた美男は、新しい商売として写真屋を選択。写真技術を学び、中之島公園で花見客などを相手にスナップ写真を撮る街頭写真屋から身を起し、その後、写真館を開業。やがて大阪の福島西通りに、ハイカラな洋館風の「田辺写真館」を新築するまでに事業を発展させました。

1928(昭和3)年、聖子は父・田辺貫一と母・勝世(福山市に隣接する岡山県井原市芳井町出身)の長女として、写真館で生まれました。そして曾祖母や祖父、両親や弟妹、叔父叔母、写真技師たちのいる大所帯の中で育ちました。聖子のエッセイ『田辺写真館が見た「昭和」』(文藝春秋

## 福山にルーツを持つ文化勲章を受章した国民的作家

# 田辺聖子

たなべ せいこ (1928-2019)

2006(平成18)年から翌年にかけて放送されたNHK連続テレビ小説『芋たこなんきん』は、聖子の半生をもとに制作。ドラマの中で、福山出身の祖父や曾祖母、そしてモダンな父たちが織りなす賑やかな大家族の暮らしが描かれました。聖子がモデルの主人公には藤山直美、祖父役を岸部一徳、曾祖母役を淡島千景、父役を城島茂、母役を鈴木杏樹と香川京子が演じました。

2007(平成19)年、母校の大阪樟蔭女子大学に「田辺聖子文学館」が開館。2008(平成20)年には、長年の執筆活動の功績により文化勲章を授与されました。

聖子は、樟蔭女子専門学校(現・大阪樟蔭女子大学)卒業後、金物問屋に勤務しながら、同人誌に原稿を送り始め、退社後は大阪文学学校で学びながら、作家としての基礎を固め、創作活動を本格化させました。1964(昭和39)年、『感傷旅行(センチメンタル・ジャーニー)』で第50回芥川賞を受賞。以後、恋愛小説(『ジョゼと虎と魚たち』『言い寄る』等)からエッセイ(『あか力モカのおつちゃん』『残花亭日曆』等)、評伝(『ひねくれ一茶』等)、古典の現代語訳(『新源氏物語』等)まで幅広いジャンルで執筆活動を行い、大阪を舞台にした作品や古典への造詣の深さをその特徴としています。また、『スヌー物語』を著すほど、無類のスヌービー好きで知られました。

2005(平成17)年に、写真館を舞台に自由でハイカラな戦前昭和の空気や家族の姿、そして懸命に生きる庶民の暮らしなどが綴られています。大阪の風俗文化に深く親しみながら育った写真館での生活が、人間味溢れる楽観主義や優れた人間観察力、さらには人間を丸ごと受け入れる無条件の肯定といった、後の作家活動の基盤を形づくったものと思われれます。



「田辺聖子文学館」開館式典会場にて(2007年)  
(写真提供: 大阪樟蔭女子大学 田辺聖子文学館)